

イェイツの往相と還相

——〈終末〉と〈空〉——

内 藤 史 朗

1

詩集『マイケル・ロバーツと踊り子』^①において、詩人は〈終末〉を意識していると考えるのは、筆者だけだろうか。この詩集には、一九一四年作の一つの詩を例外として、他はすべて一九一六—一九年に作られた詩が収められ、『一九一六年復活祭』^②などのような蜂起に関する詩もいくつかある。〈終末〉を意識すれば、その超克を考えても不思議ではなく、一九一九年には、〈終末〉の超克を〈存在の統一〉^④に求めて、踊り子を通して表現した詩『マイケル・ロバーツの二重の幻視』^⑤が作られたが、この詩はもう一つの詩集に収められている。この詩では、スフィンクスと仏陀

の間で踊り子が踊っている。スフィンクスは「既知の物と未知の物を凝視する知性」^⑦を、仏陀は「愛される者と愛されない者を凝視する心情」^⑧をそれぞれ表象し、踊り子は「芸術のイメージ」^⑨を表象する。

エルマン (Richard Ellmann) は、「人間がその全能力を十全に利用して冒瀆的完成を求める」^⑩のがスフィンクスであり、「その全能力を舵をとって方向を誤らないようにすること」で、その精神的完成を求める」^⑪のが仏陀であると解釈している。この限りでは、エルマンは大乘仏教がある程度理解している。

O little did they care who danced between,

And little she by whom her dance was seen
So she had outdanced thought.
Body perfection brought,

For what but eye and ear silence the mind
With the minute particulars of mankind?
Mind moved yet seemed to stop
As 'twere a spinning-top.

("The Double Vision of Michael Robartes")

おゝ、彼らは誰が二人の間で踊るかなど気にしないし
彼女も自分の踊りが誰に見られているかなど気にしない
彼女が想念を踊りで圧倒している限りは。
肉体が完成をもちたのだ。

人類の微細な心のひだでもって
目と耳が精神を沈黙させる以外に
何が沈黙させると言うのか。
精神は動いていたが、いわば
糸車の頂点のように停止しているように見えた。

(傍点は筆者)

この糸車と、一九一八年作の詩『円い塔の下で』
("Under the Round Tower") は、一九二五年初版の『幻
想録』(A Vision) における二円錐の交叉した円塔と関連し
ている。

糸車は、「シイラを包む布」^⑩と関連し、その布がはがされ
ていくのを、「逆戻りの夢想」(dreaming back) のイメー
ジとしているから、糸車もまた、この「夢想」と関連して
連想することが可能になる。この「夢想」については、往
相と関連して後に述べる。

『円い塔の下で』の最終連では、「ビリー・バーンという
一七九八年の反乱の英雄の名が出て来るが、この詩では乞
食の名とされて出て来る。

'It's certain that my luck is broken,'
That rambling jailbird Billy said;
'Before nightfall I'll pick a pocket
And snug it in a feather bed.
I cannot find the peace of home
On great-grandfather's battered tomb.'
("Under the Round Tower")

「俺の運は尽きたにちがいねえ」と

当てのない籠の鳥のビリーは言った。

「夜のふけぬうちに、スリをして

獲物を羽毛の寝床に蔵っておこう。

曾祖父のおんぼろ墓では

家庭の平和は見つかんないからな。」

一八年という制作年から考えると、一六年に勃発した復活祭の蜂起のリーダー達に対するアンビヴァレントな感情が、このビリーという叛徒の名と乞食の名の両方に通じた名をもつ男への感情にも見られるのではないか。無鉄砲に蜂起した反乱の英雄に対する距離をおいた見方が認められるが、他方では、「曾祖父のおんぼろ墓」では「家庭の平和は見つかんない」として、スリまでして現世の生活にこだわるビリーに一沫の共感を詩人はいだいていたのかもしれない。もしそうなら、これは、イエイツの還相といえる。往相と還相が同時に認められると筆者が考える詩は、『学童にまじわりて』(一九二六年作)の最終連である。

Laobur is blossoming or dancing where

The body is not bruised to pleasure soul,

Nor beauty born out of its own despair,
Nor blear-eyed wisdom out of midnight oil.
O chestnut-tree, great-rooted blossomer,
Are you the leaf, the blossom or the bole?
O body swayed to music, O brightening glance,
How can we know the dancer from the dance?

(“Among School Children”)

労働は花咲き、舞い踊ること——そこでは
魂を悦ばすために肉体を傷つけることなく
美も自らの絶望から生まれるのでなく
螢雪の功になるかすみ目の知恵もない。
おゝ、栗の木よ、大きい根の花咲く木よ
おまえは葉か、花か、それとも幹か。
おゝ、音楽に合わせて揺れる肉体よ
おゝ、輝く瞳よ
踊り子と踊りをどう区別できようか。

(傍点は筆者)

最後の行(傍点箇所)に二重の意味があると筆者は考える。
鳥弘之氏は論文「エコーする声—W・B・イエイツのへ存

在の統一性^⑭」の中で、従来行われていた修辭疑問としての解釈すなわち「踊り子と踊りを区別できない」として〈存在の統一〉を認める解釈以外に、ド・マン (Paul de Man) による文字通りの解釈すなわち「区別できようか」として区別を強調し主張する解釈を示した。‘where’に続く三行はまさにユートピア的境地であり、このような境位を彼岸として目指すとしたら、そこには往相が認められる。しかし、イエイツは還相をけつして忘れない詩人だから、現実の「踊り子と踊りの区別」を直視する還相的見方も有していたと考えられる。

往相と還相が同時に最後の詩行（訳では傍点箇所）に認められるとしたら、両相ないしは両極の間の揺れこそが注目すべきである。

^⑮ 宮内弘氏は、筆者と視点は異なるが、揺れに着目している。

本稿では、往相と還相の間の揺れの観点から、イエイツの詩や思想の発展を辿ってみる。

かつて筆者は拙稿「イエイツと禅」^⑯において『ビザンチウムへの船出』^⑰（二六年作）と『ビザンチウム』の相異を指摘したことがある。これについては、後者の詩には還相があると最近の拙著でさらに論じた。

この二つの詩は、前者が詩集『塔』^⑱に、後者が詩集『螺旋階段とその他の詩』^⑲にそれぞれ収められている。

アダムズ (Hazard Adams) は、「詩集『塔』には、詩（複数）の年代的配列であったものから、二重の“dreaming back”と“return”を意味する配列への変化がすでにあった」と述べた。さらに、「詩集『塔』にはまたある種のテーマで決まり、それ独自の年代記を有する虚構の人物（フィクション）の中の詩人のフィクション」をもった一組の詩を、詩人が創出した一連の詩『若きまた老いたる男』の出現にわれわれは気がついたのである」とも言っている。

要するに、詩集『塔』にすでに年代記的配列から、“dreaming back”と“return”の配列への変化が出ているが、その詩集に収められている長詩『若きまた老いたる男』^⑳では年代記的配列が残っているということである。

ところが、詩集『螺旋階段とその他の詩』になると、「ゆりい年代順を保持しながら、詩や詩群の間の対立関係を強調するコレクション（連続物ではない）を作っている。対立は、“personal”な振れ (vacillation) を形成する」とアダムズは言っている。

このような両詩集の間の変化発展は、ビザンチウムに関する二作品の相異と符合する。明らかに詩『ビザンチウム』

(後者)における還相の結びは、‘personal’な振れが形成されたことを意味しているからである。

At midnight on the Emperor's pavement flit
 Flames that no faggot feeds, nor steel has lit,
 Nor storm disturbs, flames begotten of flame,
 Where blood-begotten spirits come
 And all complexities of fury leave,
 Dying into a dance,
 An agony of trance,
 An agony of flame that cannot singe a sleeve.

Astraddle on the dolphin's mire and blood,
 Spirit after spirit! The smithies break the flood,
 The golden smithies of the Emperor!
 Marbles of the dancing floor
 Break bitter furies of complexity,
Those images that yet
Fresh images beget,
That dolphin-torn, that gong-tormented sea.
 (Italics mine) (“Byzantium”)

真夜中、皇帝の石畳を

薪が燃やすでも、火打石がつけるでも
 嵐が乱すでもない焰、焰から生じた焰が
 飛び交い、そこに血から生じた霊が来て
 狂乱の複雑錯綜したものどもすべて去り
 死んで、踊りとなり

恍惚の極み

袖を焦がさぬ焰の極みとなる。

イルカの泥と血にまたがって

次から次と霊が！金工の炉が潮を砕く。

皇帝の金工の炉が！

踊りの踏み床の大理石が砕く

複雑錯綜のむごい狂乱を

それらのイメージを

——しかし新鮮なイメージを生むことになるのだが——

イルカが裂く海を、銅鑼がさいなむ海を。

筆者は、拙稿「詩人イエイツの回心」^②において次のように述べた。

この詩でも、前のスタンザで「空」や能による地上からの上昇を謳い、このスタンザで、再び地上に降りて、地上の浄化を謳っていると考えられる。再び地上へ関心が移っても、浄化された「踊りの踏み床」によって、地上的なもの——「複雑錯綜のむごい狂乱」——をうち砕く。その際、弁証法的な相剋によって、「新鮮なイメージ」が生み出されるのだと筆者は解釈する。この詩の草稿の成立過程を調べると、「blind images that yet / Blinder images beget」→「Those images that yet / More images beget」→「Those images that yet / Fresh images beget」となっている。「Blinder」はさらに悪化することを意味し、「More」もこれと軌を一にする。しかし、「Fresh」となると、いかにもイエイツ自身がこの詩の推敲の過程で、「踊りの踏み床の大理石」で「複雑錯綜のむごい狂乱」を、「それらのイメージ」をうち砕いた結果、そして、その相剋の結果、生み出したイメージを、「新鮮な」と形容したように考えられる。

こうなると、ここでは還相が謳われているといえる。第四、第五のスタンザではそれぞれ往相と還相が謳われ、前者では禅や能のエコーが、後者ではタントラのエコーが見られる。^⑨

2

ビザンチウムの二つの詩の制作年（一九二六年と一九三〇年）の間にあたる一九二七年秋からイエイツは大拙の英文著作 *Essays in Zen Buddhism, 1st Series* (Luzac, 1927) を読んでいた。しかし、二七年秋というだけでは、ビザンチウムの二つの詩の変化の契機は大拙の著作を詩人が読んだことであると断言するのは無理であろう。だが、ここで、もっと時間的に絞り込むような証拠が出て来れば、その契機になった可能性は高くなる。

アダムズは、詩『エヴァ・ゴアブースとコン・マキィウィッツ追憶』^⑩の第一連と第二連の制作時期が、二人の婦人の生前の一九二六年と、死後の一九二七年十月であることを指摘している。^⑪大拙の著作を読んだ直後に第二連を書いたことは十分理由のあることである。

The light of evening, Lissadell,
Great windows open to the south,
Two girls in silk kimonos, both
Beautiful, one a gazelle.
But a raving autumn shears

Blossom from the summer's wreathe ;
 The older is condemned to death,
 Pardoned, drags out lonely years
 Conspiring among the ignorant.
 I know not what the younger dreams—
 Some vague Utopia—and she seems,
 When withered old and skeleton-gaunt,
 An image of such politics.
 Many a time I think to seek
 One or the other out and speak
 Of that old Georgian mansion, mix
 Pictures of the mind, recall
 That table and the talk of youth,
 Two girls in silk kimonos, both
 Beautiful, one a gazelle.

Dear shadows, now you know it all,
 All the folly of a fight
 With a common wrong or right.
 The innocent and the beautiful
 Have no enemy but time ;

Arise and bid me strike a match
 And strike another till time catch ;
 Should the conflagration climb,
 Run till all the sages know.
 We the great gazebo built,
 They convicted us of guilt ;
 Bid me strike a match and blow.

("In Memory of Eva Gore-Booth and Con
 Markiewicz")

夕陽に映えるリサデルの邸では
 南に開かれた大きな窓があり
 絹地の着物をはかった二人の少女
 ともに美人、一人はカモンシカ。
 しかし狂乱の秋が夏の花輪から
 花を剥ぎ取り

年上の娘は死刑の宣告を受け
 許されたが、無知な者どもの中で
 陰謀をめぐらし、わびしい年月を
 生き延びた。
 年下の娘が夢見たもの——漠然とした

ニートピア——それを私は知らない。
彼女は老い皺が寄り骸骨さながらで
政治の権化だ。

私は何度もいづれかの娘を探しては
あの古いジョージ朝の邸の話をし
心象をまぜ合わせ、あのテンプルや
若き日の話を想い出そうと思った。
絹地の着物をはおった二人の少女
ともに美人、一人はカモシカ。

いとしい影よ、今きみ達は
すべてをご存知だ

公の正邪と戦うことの愚かさを。
無垢の人や美人の敵は時だけだ。
姿を現わして、私にマッチを擦れと
命じておくれ、時間に火がつくまで
マッチを次々擦りまくれと。

万一大火災が起ったら
すべての聖人が知ることになるまで
走り回れ。

われらは大きな見晴らし台を建てた。

彼女らはわれらを有罪とした。

私にマッチを擦れ、吹子を吹けと
命じておくれ。

姉は復活祭の蜂起の指導者の一人として死刑の判決を受けたが、婦人であることが考慮され減刑の後赦免された。妹は婦人参政権運動に活躍した。姉妹ともにアイルランドの有名な政治運動家であった。ところが、イエイツによれば、こういう「政治」は、「抽象への関与」であり、「通俗への愚かな関与」であり、そういう関与と活動を、彼は「政治」と呼んだのである。^③

一連では姉妹の現世（生前）における「政治」活動と、若き日に日本の着物をはおった姿をコントラストさせている。現世の「政治」は〈本源的〉（Primary）であるが、二連では死後の姉妹は、イエイツが現世で知っていた真実を知り、〈対照的〉（Antithetical）である。この詩では、現世の「政治」と、死後の世界が対立したものとして示されている。現世も「大火災」（conflagration）によって、〈本源的〉な円錐の底まで行きつけば、新しい〈対照的〉な円錐がきつと始まると、イエイツは信じたのである。^④

詩集『螺旋階段とその他の詩』の配列では、詩『死』^⑤は

前に引用した詩のすぐ次に来る。

Nor dread nor hope attend
A dying animal;
A man awaits his end
Dreading and hoping all;
Many times he died,
Many times rose again.
A great man in his pride
Confronting murderous men
Casts derision upon
Supersession of breath;
He knows to the bone—
Man has created death. ("Death")

頻死の動物は恐怖も希望もいらない。
人間はすべてを恐れ、希望をいだって
臨終を待つ。
人間は何度も死に
何度も蘇った。
偉人は殺しに来た刺客と

誇らかに対面しながら

呼吸の停止を嘲笑う。

彼は死を骨の髄まで知っているから——

人間は死を創り出した。

アダムズは、この詩でも死を「対照的」な世界としているとして、前詩の考えをイエイツはさらに徹底させ、生の世界と死の世界を正反対の極においたとする^⑧。しかも、この詩では、人間が何度も再生することが謳われている。

詩集の配列順では、次に詩『自我と魂の対話』^⑨が来る。

この詩は、詩人エーイー (A.E. George Russell) が、イエイツに禅の影響があるとしたらこの詩からであろうと推測した詩である。このエーイーの言葉は、拙著や拙稿で引用され^⑩、筆者は大拙の禅とイエイツの関係を論じて来た。

結論から先に述べると、アダムズは、詩集『螺旋階段とその他の詩』の最初の三つの詩は、「対照的」姿勢を循環 (cyclicity) と一致させる結論に至った^⑪と述べた。かくして、生と死の世界を対照的に捉えながら、循環ないしは輪廻によって人間の魂は永遠性を得る。循環ないし輪廻を想定し、現世の人間は彼岸へ憧れながら、此岸にこだわる。往相と還相はこうして生じる。

往相と還相の二相は両極をつくり上げ、それらの循環は、円環をなし、発展を縦軸とすれば、螺旋状に展開する。こうして螺旋階段によって意味するものは、ユダヤ教—キリスト教の〈終末〉観を乗り越えることが可能となる。往還二相はこうに分かちがたく関連しながら、歴史主義のような年代記的直線的史観と対決するものとなる。

次の「悦び」(sweetness)は、こうして得られたものであると筆者は思う。

I am content to follow to its source
Every event in action or in thought;
Measure the lot; forgive myself the lot!
When such as I cast out remorse
So great a sweetness flows into the breast
We must laugh and we must sing,
We are blest by everything,
Everything we look upon is blest.
(“A Dialogue of Self and Soul”)

行為にしても思想にしても

あらゆる出来事を根源まで突きつめたい。

運命を計り、運命を甘受せよ。

私のような者も悔恨を捨てれば

大きい悦びが胸中に溢れて

われらは笑いや歌がこみあげ

われらはあらゆるものに祝福され

われらの見るものすべてが祝福される。

3

大拙の禅がイエイツに教えたことは、「〈生の受容〉によって〈現世における解脱〉に到達する」ことであつたと拙稿で述べた。

大拙の禅にイエイツが共鳴した理由は、イエイツは一般化や抽象を好まず、現実の中で自由を得ようとする処にある。イエイツが〈終末〉の超克を考えるにあたっても、この一点は変わらなかつた。彼は現実世界に立脚する立場で、往相と還相への志向を同時に有する。その時、カビールの謳った「ガンジス河とジャムナ河の交わる処」のように、往還二相への志向は、イエイツの心の中で交わり、旋回し、渦となる。その渦中に、台風の目のように〈無〉が生じ、〈空〉となる。

イエイツにとって、〈無〉や〈空〉は、流れの変わる転換

点でもある。二つの円錐の交叉する場合なら、底面がもう一つの円錐の頂点と交わる処である。

Those that Rocky Face holds dear,
Lovers of horses and of women, shall,
From marble of a broken sepulchre,
Or dark betwixt the polecat and the owl,
Or any rich, dark *nothing* disinter
The workman, noble and saint, and all things run
On that unfashionable gyre again. (Italics mine)

(“The Gyres”)

岩の顔がいとしみ尊重する人達
馬や女を愛する人達が
壊れた墓の大理石から
私たちと桌の間の暗がりから
あるいは、いずこにせよ
豊穣な、真暗闇の無から
工匠、貴族、聖者を発掘するだろう。
万物は再びあの時代遅れの
円環を回るので。

この〈無〉(nothing)は流れの転換点の例である。詩『彫像』第三連の最終二行と第四連の最初二行にも時代の流れの転換点が表示されている。

When gong and conch declare the hour to bless
Grimalkin crawls to *Buddha's emptiness*.
When Pearse summoned Cuchulain to his side,
What stalked through the Post Office? (Italics mine)

(“The Statues”)

銅鑼や法螺貝が祝福の時を告げる時
魔女の猫が仏陀の空へと這う。
ピースがクフリーンを傍らに呼んだ時
何がああ郵便局の中を濶歩したか。

魔女の猫でさえ大自在の境地〈空〉の境地へ近づける。
これこそ「煩惱即菩提」である。〈空〉の境地では、クフリーンの霊もピースの呼び出しに應えて現われる。「濶歩する」(stalk)は活力のみなざる大自在の境地を示す言葉ではないか。「銅鑼」や「法螺貝」も時代の転換点を示している。

る。

拙著 *Yeats's Epiphany: His Quest for the Last Masks* ④
で、筆者は、『詩『黒い塔』⑤の最終連には「見えない仮面」
として、カビールの〈空住〉⑥があるのではないかと述べて
いる。〈空住〉の〈空〉は、『彫像』の‘emptiness’と同じ
く、‘*sunyata*’のことである。

鈴木大拙には「カビールの禪」という論文があることを
最近筆者は教えられた。大拙はカビールの詩に禅思想を見
出していた。別に大拙に教えられなくとも、イエイツほど
大拙の著作とカビールの詩集を読んでもいれば、両者の一致
点には気がついていたと思う。こう考えれば、キャスリー
ン・レイン (Kathleen Raine) と筆者との墓碑銘をめぐる
意見の相違は、カビールと大拙との一致点によって、解消
するのである。

The tower's old cook that must climb and clamber
Catching small birds in the dew of the morn
When we hale men lie stretched in slumber
Swears that he hears the king's great horn.
But he's a lying hound:
Stand we on guard oath-bound! ("The Black Tower")

塔の老料理人は、元氣なわれらが
寝そべっている時、朝露の中を

小鳥を捕えようとよじ登り

「王の偉大な角笛の音を聴いた」

と誓う。

だが、あいつは嘔吐き犬だ。

われらは誓言を固く守り見張るのだ。

この「老料理人」を「嘔吐き犬」と言い切る詩人は、そ
のポーズが仮面としても、千年王国論から唯物史観までを
含む、あらゆる種類の歴史主義——年代記的直線的歴史観
——を否定していると筆者は考えている。もちろん、〈終
末〉観も否定され超克されている。その時のイエイツの仮
面は、東洋の〈空住〉であり、抛って立つ場は〈空〉であ
るとするのが筆者の考えである。

このような解釈を裏付ける論拠として挙げられるのは、
この詩のリフラインについてストールワーズィ (Jon Stall-
worthy) が指摘した謎である。その謎が大拙の禪によれば
明快に解明されるのである。

There in the tomb the dark grows blacker,

*But wind comes up from the shore :
They shake when the winds roar,
Old bones upon the mountain shake.*

(“The Black Tower”)

墓の中で闇はさらに深くなるが

風が海辺から吹いて来る。

風が鳴ると彼らは震える。

山上の遺骨が震える。

埋葬された彼らの遺骨が「震える」のは、謎である。ス
トールワーズィは指摘している。^{⑤②}だが、ここで、大拙の著
作によってイエイツが知り得た禅思想の「透明」(“transpar-
ency”^{⑤③})の考えを考慮すれば、明快に解決する。

拙著 *Yeast and Zen* ^{⑤④}で引用された大拙の英文の大意は
こうなる。

「自然はいつも動いているので、^{フイテンテライタイ}静穏や正体は静的
状態だから、そんなものを禅は求めるのではない。へ自然
との「一体化」と言っても、それが静止的なものである限り、
求めるべきものではない。」^{⑤⑤}

さらに大拙はこう述べている。

「自然とわれわれの間に設けたすべての人工的障害物を
破壊しよう。というのは、それらが除去された時はじめて
われわれは自然の生きた心の中を洞見し、それと一体とな
って生きるからである——そして、これこそがまさに愛の
真の意味なのである。だから、これについて言えば、すべ
ての概念的足場を除去することは絶対に必要なのである。」^{⑤⑥}
禅思想の「透明」とは、この「足場の除去」にほかなら
ない。除去すれば、自然と一体になるから、その時、遺骨
は埋葬されていても、「透明」となり、「震える」のである。
リフレインの謎には東洋思想が隠れていたのである。

さらに言うならば、「足場の除去」の結果、人の心は和
み、やさしさが生じるであろう。これは、親鸞の場合にも
結果は同じになるのではないか。^{⑤⑦}

往還二相は、イエイツにおいては、〈空住〉を契機とし
て大自在の境地を得る前提となった。その大自在の境地は、
イエイツの墓碑銘「生にも死にも冷たいまなざしを投げよ。
骑手よ、駆け行け。」において謳われている。

詩『人間と飢』の次の箇所はイエイツが晩年に現世にお
ける往生を考えていた証拠ではないかと筆者は考えて来た。^{⑤⑧}

While man can still his body keep

Wine or love drug him to sleep,
 Waking he thanks the Lord that he
 Has body and its stupidity,
 But body gone he sleeps no more,
And till his intellect grows sure
That all's arranged in one clear view,
Pursues the thoughts that I pursue,
Then stands in judgment on his soul,
 And, all work done, dismisses all
 Out of intellect and sight
 And sinks at last into the night. (Italics mine)

(“The Man and the Echo”)

人間がまだ肉体を保持している間は
 酒や愛が彼を眠らせる。
 目覚めると、肉体とその愚かさを
 もっていることを神に感謝するが
 肉体が消えると彼はもう眠らない。
 そして、万物がよく見通せる視野の中に
 配置されたと知性が確信するまでは
 人間は私が耽って来たような

いろんな想いに耽り、自分の魂を審判する。

すへてがなされると

知性や視角から全部お払い箱にして

ついに夜の中に沈み込む。

『幻想録』の初版^⑧（二五年版）では、死後の世界として
 ‘dreaming back’ のことが述べられている。人間は死後
 に、生前体験したことを逆にさか上って夢想のように体験
 するといふのである。しかし、三七年版^⑨（改訂増補版）では、
 ヨーガの行者が生きながらにして死後の世界を体験できる
 ことが述べられ^⑩、こうなると、‘dreaming back’ も生前
 に体験できることになる。このことから、引用の斜体箇所
 は、生前の ‘dreaming back’ のことではないかと筆者は
 考える。「肉体が消えると…」は「身心脱落」のことかと
 も考えるが、大拙は「脱落」を ‘dropping’ と英訳してい
 るので、一応これはとらない。そうすると、ここで一たん
 切れて、次行の「そして」はそういう生前の体験としての
 ‘dreaming back’ であり、イエイツの往相はここまで質
 的に高められたと思う。

この詩の最後の詩行はこう謳われる。

Up there some hawk or owl has struck,
Dropping out of sky or rock,
A stricken rabbit is crying out,
And its cry distracts my thought.

(“The Man and the Echo”)

鷹か梟が現われて
空か岩から急降下して襲う。
死に際の兎が悲鳴をあげる。
その泣き声がわが想念をかき乱す。

ここには還相がある。最後の一行は還相を実感として表現している。

ヨーガの行者の瞑想と禅僧の瞑想とがだぶっているようにも考えられる。心を無にして「兎」と一体化することが可能になるからである。これは「足場の除去」による自然との真の一体化なのであろう。ここに「大悲」を認めることが出来よう。「大悲」とは自己を無にして可能な仏教の慈悲であるからである。いずれにせよ、イエイツの往還二相が、その最期の局面で際立っていることは疑いない事実である。

(本稿中の訳文はすべて筆者による。詩集や詩の題名の原名は、あまり知られていないものだけ本稿中で示した。知られていない原名は、本稿中では出さず、註に記した。)

註

- ① *Michael Robartes and the Dancer* (1921).
- ② “A Meditation in Time of War” was written on 9 November 1914.
- ③ “Easter 1916”.
- ④ “Unity of Being”.
- ⑤ “The Double Vision of Michael Robartes”.
- ⑥ *The Wild Swans at Coole* (1919).
- ⑦ Richard Ellmann, *The Identity of Yeats* (Faber, 1953), p. 255.
- ⑧ *Loc. cit.* ⑨ *Loc. cit.*
- ⑩ *Loc. cit.* ⑪ *Loc. cit.*
- ⑫ ‘mummy-cloth’ (“Byzantium”).
- ⑬ ‘Billy Byrne: there was a Wicklow hero in the 1798 Rebellion...’ (Jeffares).
- ⑭ Yeats’s ambivalent feeling found in “Easter 1916”.
- ⑮ “Among School Children”.
- ⑯ 『浮遊する意味』「現代哲学の冒険」(岩波書店、一九九〇年)所収。
- ⑰ Paul de Man, *The Rhetoric of Romanticism* (Columbia U. P., 1984), pp. 197-202.

- ②⑧ 宮内弘「詩の結末にみられるイエシンの転換」『英文学評論』LX集(京大教養部英語教室一九九〇年)所収。
- ②⑨ 『英語青年』一九七五年一月号(研究社、一九七五年一月)所収。
- ③① “Sailing to Byzantium”.
- ③② “Byzantium”.
- ③③ Shiro Naito, *Yeats's Epiphany: His Quest for the Last Masks* (Yamaguchi, 1990).
- ③④ *The Tower* (1928).
- ③⑤ *The Winding Stair and Other Poems* (1933).
- ③⑥ Hazard Adams, *The Book of Yeats's Poems* (Florida U. P., 1990), p. 179.
- ③⑦ *Loc. cit.*
- ③⑧ “A Man Young and Old”.
- ③⑨ H. Adams, *op. cit.*, p. 179.
- ③⑩ 『西洋文学研究』第三号(大谷大学文学研究室、一九八二年)所収論文。
- ③⑪ 同書、三〇—三十一頁。
- ③⑫ “In Memory of Eva Gore-Booth and Con Markiewicz”.
- ③⑬ H. Adams, *op. cit.*, pp. 180-1.
- ③⑭ *Ibid.*, p. 181.
- ③⑮ Yeats, *A Vision* (Macmillan, 1937), Book 1.
- ③⑯ “Death”.
- ③⑰ H. Adams, *op. cit.*, p. 183.
- ③⑱ “A Dialogue of Self and Soul”.
- ③⑲ Monk Gibbon, ed., *The Living Torch* (Macmillan, 1937), pp. 92-3.
- ③⑳ Quoted in Shiro Naito, *Yeats and Zen* (Yamaguchi, 1983), pp. 26-7.
- ㉑ 拙稿「イエシンと東洋思想」『W・B・イエイツ論—仮面の変貌』(南雲社、一九七八年)二一一頁。
- ㉒ H. Adams, *op. cit.*, p. 183.
- ㉓ 前掲の拙稿、同所。
- ㉔ Roger McHugh, ed., *Ah, Sweet Dancer* (Macmillan, 1970), pp. 55-6.
- ㉕ S. Naito, *Yeats's Epiphany* (Yamaguchi, 1990), pp. 63-4.
- ㉖ “The Statues”.
- ㉗ My book published in 1990 by Yamaguchi Publishing House, Kyoto.
- ㉘ “The Black Tower”.
- ㉙ S. Naito, *Yeats's Epiphany*, pp. 58-9, 67.
- ㉚ 日本宗教学会における小林円照教授の「大拙の見たカビーハの禅」(一九九〇年九月三十日、於大谷大)。
- ㉛ Naito, *Yeats's Epiphany*, pp. 40-1.
- ㉜ *Ibid.*, pp. 58-9.
- ㉝ Jon Stallworthy, *Between the Lines* (Oxford U. P., 1963), p. 229.
- ㉞ *Loc. cit.*

- ⑤③ Naito, *Yeats and Zen*, Chapter 8.
 ⑤④ My book published in 1983 by Yamaguchi Publishing House.
 ⑤⑤ *Ibid.*, p. 72.
 ⑤⑥ *Ibid.*, pp. 72-3.
 ⑤⑦ 親鸞が「たとえ法然上人にだまされようとも…」と言う時、やさしさ、和みが生じる。
 ⑤⑧ 拙稿「詩人イエイツの回心」『西洋文学研究』第三号（前掲）
 の書）所収。
 ⑤⑨ Yeats, *A Vision* (Privately printed by T. Werner Laurie, LTD, 1925).
 ⑤⑩ Yeats, *A Vision* (Macmillan, 1937), Book III.
 ⑤⑪ 拙稿「詩人イエイツの回心」前掲の書所収。
 ⑤⑫ Naito, *Yeats and Zen*, Chapter 7.
 （本学教授 英文学）
 （平成二年十月四日受付）